

| | |
|-------------|------------|
| 群 教 セ | F08 - 01 |
| | 令 6. 287 集 |
| | 生徒指導 |

他者とのコミュニケーションを楽しみ、学び合うことのできる児童の育成

—授業における発達支持的生徒指導—

特別研修員 深澤 利光

I 研究テーマ設定の理由

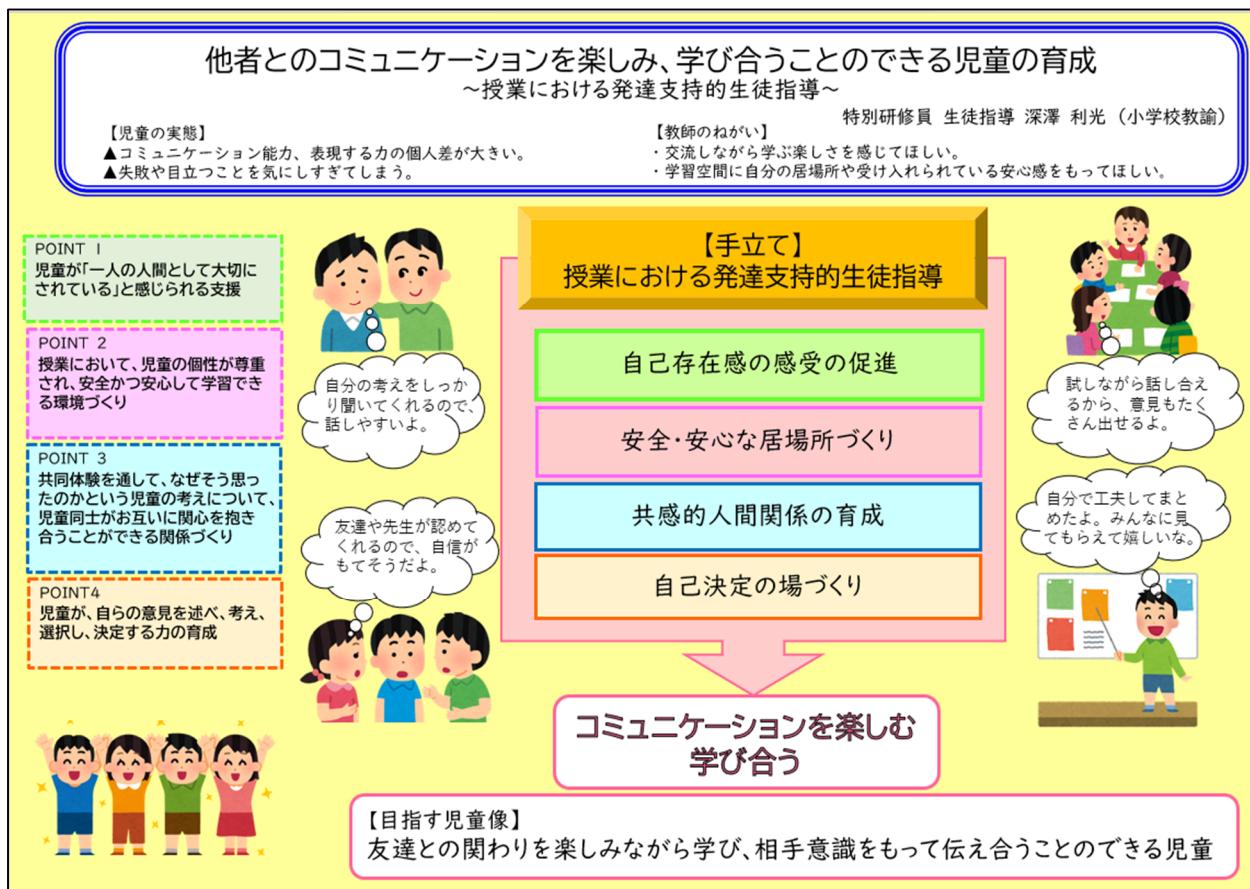
21世紀を生き抜く力を育成するため、これからの中学校は、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力や習慣の形成等を重視する必要がある。コミュニケーションを通して新たな知識・技能を得たり、学びを深めたりしていくことは、これからの中学校の中においても重要なスキルとなる。

研究協力校の児童の実態としては、コミュニケーション能力や考え方を表現する力の個人差が大きく、人間関係を形成していく力が充分に身に付いているとは言えない。グループや全体交流でも、考え方を表現できる児童が限定されており、対話的な学びになっているとは言えない。これは、失敗や目立つことに対する不安が大きく、過剰な警戒心があることや、コロナ禍による他者との関わりの少なさや体験活動の乏しさが要因と考えられる。

そこで、発達支持的生徒指導の四つの視点である、「自己存在感の感受の促進」「安全・安心な居場所づくり」「共感的人間関係の育成」「自己決定の場づくり」を意識した手立てを取り入れていくことで、誰もが安心して学びに向かうこと、友達とのコミュニケーションを楽しむこと、そして交流から学びや気付きを得ることができるようになると考え、本研究のテーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 研究上の手立て

児童が安心してコミュニケーションを楽しみ、学び合うことができるよう以下のような手立てで実践を行った。

～授業における発達支持的生徒指導～

手立て 1

- ・児童一人一人の考えを大切にしつつ、多様な考えがあることをクラス全員が実感・共有できるようにするために、ICTを活用する。
- ・児童が、見守られている安心感や認められている実感をもてるようにするために、授業で積極的に活動に取り組んでいる姿など、児童のよさや頑張りが見られる場面を、単元末プリントにメッセージを書いて個別に伝える。

手立て 2

- ・児童が自分の居場所を感じることができるように、実験や準備、発表など意図的に全員に役割がある場を設ける。
- ・交流を円滑にするため、児童の個性や人間関係に配慮した座席を作り、ペア・三人組の少人数交流を行う。

手立て 3

- ・児童が関心を高めることのできる題材や、簡単に試行できる道具を用意することで考えを表出しやすくしたり、多様な気付きを共有できるようにしたりする。
- ・単元末に学習アンケートを行い、その結果から児童の思いや実態を把握し、学ぶ楽しさを更に感じられる学習計画を立てたり、それぞれの児童が安心して交流することのできる場づくりにつなげたりできるようにする。

手立て 4

- ・自分たちで相談して、自分たちで決定していくことができるよう、実験器具や追究の方法などを選択する場面を設定する。
- ・各自が得た学びを表現できるように、単元末にまとめのスライドやポートフォリオ作成を行い、自分たちの作品を紹介し合う。友達のまとめ方のよい点や工夫されている点を伝え合う。

III 実践例

1 単元名 「てこのはたらきとしくみ」（第6学年・2学期）

2 本単元（題材）について

本単元は、加える力の位置や大きさに着目して、これらの条件とてこの働きとの関係を多面的に調べる活動を通して、てこの規則性についての理解を図り、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主により妥当な考え方をつくりだす力や主体的に問題解決しようとする態度を育成することがねらいである。実際にてこを使っておもりを持ち上げ、支点・力点・作用点の位置関係によって手ごたえが変わることや、おもりを吊るす天秤を使って、左右のうでがつり合う時の規則性を捉えるなど、実感を伴う活動が多くある単元である。また、てこの規則性を利用した道具が身の回りにも数多くあり、理科の学習内容が実生活の中で活用されていることを感じることができるもの、本単元の特徴である。約2500年前にアルキメデスによって発見されたてこの原理が、今もなお生活に生かされていることを知り、理科学習と実生活の関連性や活動の楽しさを実感できるものと考える。

以上のような考え方から、本単元では以下のよう指導計画を構想し実践した。

| | |
|----|---|
| 目標 | 【知識及び技能】 |
| | ・作用点の位置や力点の位置を変えると、てこを傾ける働きが変わることや、てこが水平につり合うときのきまりは、力の大きさと支点からの距離の積で表すことを理解している。 |
| | ・身の回りには、てこの規則性を利用した道具があることについて理解している。 |
| | 【思考力・判断力・表現力等】 |
| | ・てこが水平につり合うときのきまりについて問題を見いだし、予想や仮説を基に、解決の方法を発想し、表現している。 |
| | ・実験結果を基に、てこが水平につり合うときのきまりについて考察し、より妥当な考え方をつくりだし表現することができる。 |
| | 【学びに向かう力・人間性等】 |
| | ・てこの規則性について友達と協力して調べたり、実験結果などを互いに伝え合ったりしながら、問題解決しようとしている。 |
| | ・てこの規則性について学んだことを学習や生活に生かそうとして、モバイルの仕組みについて考えようとしている。 |

| | | | |
|------------------|---|-----|---|
| 評 価 規 準 | <p>【知識・技能】</p> <p>①力を加える位置や力の大きさを変えると、てこを傾ける働きが変わり、てこがつり合うときにはそれらの間に規則性があることを理解している。</p> <p>②身の回りには、てこの規則性を利用した道具があることを理解している。</p> <p>③てこの規則性について、実験などの目的に応じて、器具や機器などを選択して、正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を適切に記録している。</p> <p>【思考力、判断力、表現力等】</p> <p>①てこの規則性について問題を見いだし、予想や仮説を基に解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。</p> <p>②てこの規則性について、実験などを行い、力を加える位置や力の大きさとてこの働きとの関係について、より妥当な考えをつくりだし、表現するなどして問題解決している。</p> <p>【主体的に学習に取り組む態度】</p> <p>①てこの規則性について事物・現象に進んで関わり、粘り強く、他者と関わりながら問題解決しようとしている。</p> <p>②てこの規則性について学んだことを学習や生活に生かそうとしている。</p> | | |
| | 過程 | 時間 | |
| | ふれる・つかむ | 第1時 | ・1本の棒を使って、砂袋を持ち上げる活動を行い、どのようにすれば楽に持ち上げられるかについて考え、問題を見いだす。 |
| 追究する | 第2時 第3 ～6時 | | <ul style="list-style-type: none"> ・予想を基に、解決の方法を考えて班で調べ、結果をまとめる。 ・てこを使ってできるだけ小さい力で砂袋を持ち上げるときの支点・力点・作用点の位置関係を予想して調べ、結果をまとめる。 ・実験用のてこを用いて、てこが水平につり合うときのきまりを調べる方法を考える。 ・てこが水平につり合うときには、どのようなきまりがあるのか調べる。 ・てこのきまりを生かして、モビールづくりをする。 |
| まとめる | 第7・8時 | | <ul style="list-style-type: none"> ・てこを利用した道具は、どのような仕組みになっているか調べる。 ・てこの働きについて学んだことをまとめる。 |
| 主な学習活動 | | | |

3 授業の実際

本時は全8時間計画の第3時に当たる。第3時は、交流の中で気付きが生まれる展開を中心とし、手立て1、2、3に焦点化して授業を実施した。

(1) 手立て1 ICTを活用して、一人一人の考え方大切にする支援

個別に予想を出させたところ、右のAからCのような考えが多く出された。多様な考え方を共有し、実際に確かめてみる必要性に触れ、実験へとつなげた。多様な考え方を取り上げたことで、児童は友達の考えに共感したり、異なる考えがあることに気付いたりすることができた。



図1 ICTを用いた全体共有

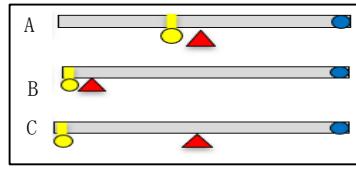


図2 授業で出た児童の予想

(2) 手立て2 全員参加の準備・実験、少人数交流

班の全員にそれぞれ準備の役割を与え、全員で体験させる場を設けた。継続的に行ってきたこともあり、児童は手際よく準備を進めていた。また、細かな用具の配置についてアドバイスし合う姿も見られた。

少人数交流は、一班五人組をペア・三人組に分けて交流させた。予想AとBを比較し、なぜBの方が軽くなるのかを話し合う場面では、コミュニケーションが苦手な児童が友達の説明を聞いて「そういうことか」と理解したり「じゃあこれはどうなるの?」と発展的な内容に関心をもつたりするなど、交流を通して学びを深めていく意識の高まりを感じた。



図3 少人数での交流

(3) 手立て3 ミニチュアを使った交流、学習内容を生かした発展的な学習

ミニチュアを、班に二つずつ用意してペア・三人組で予想する場面で活用した。実際に試しながら、自分が考える一番軽くなる支点・力点・作用点(以下、三点)の位置関係を形づくりながら伝え合う姿が見られた。また、AとBを比較する場面や、一番重くなる時の位置関係を考える場面でも活用している姿が見られた。普段発言に臆してしまう児童も、道具を試行しながら話し合ったり、自分の考えについてどう思うか聞いたりしていた。また、授業の終末に学びを深める学習として、「一番てこが重くなる時の三点の配置」と「てこを更に伸ばしたらどうなるか?」を体験させた。

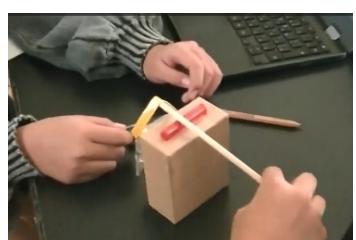


図4 ミニチュアを使った交流

一番重い三点を体感した児童からは「全然、持ち上がらない」「こんなに変わっちゃうの？」と驚きの声が上がった。また、てこを更に伸ばした際には「うわあ、軽すぎ！」「空気じやん」「てこを伸ばせばもっと重い物も持ち上げられそう」と学びの深まりが感じられるつぶやきがあった。

(4) 考察

児童がコミュニケーションを楽しみ、交流から学びが得られるようするために、教科指導に発達支持的生徒指導を取り入れた。



図5 一番重い三点を体感する

手立て1において、ICTで考えを全体共有することで、自分の考えが大切にされ、受け入れられている実感をもたせた。教師が少数派の考えを意図的に取り上げたり、他の児童に説明させたりしたこと、「自分の考えが取り上げられて嬉しかった。次は発表できるように頑張りたい。」という肯定的な記述が児童の振り返りに見られた。自分の考えが大切にされること、自分自身を大切にされている実感につながる。手立て1は、積み重ねていくことでより効果が表れてくることが分かった。

手立て2では、児童の理解度や発言力、人間関係を考慮して作成した座席をもとに、ペア・三人組で話し合わせたことで、意見交流が活発になった。発言が苦手な児童が発言できたり、互いに説明し合って新たな疑問について考えたりしている様子が見られた。考えをもって学び合うことは楽しさがあり、その中で教師の想定を超える気付きが生まれることもある。実際、授業が始まると、本時の学習問題を発展させて、一番重い三点の位置関係に興味をもち、ミニチュアで試しているグループもあった。指示した内容とは離れるが、児童の知的好奇心を大切にして、学びにつなげることも教師に求められるスキルである。

手立て3では、試行できるミニチュアを用意して関心を高めつつ、予想をもたせる工夫をしたところ、ミニチュアを使いながら、気付いたことを自然に伝え合っている姿が見られた。ただ、ミニチュアの製作にかなりの時間を要し、効率を考えるともう少し簡易的に用意できる物の方が、負担が少なくて済む。また、タブレット、ミニチュア、ノート、筆記用具とグループの机上に物が多くあり、試行しづらそうであった。手立てを取捨選択し、焦点化して実施していく方がより効果的であり、有効性に対する振り返りもしやすいと感じた。

IV 研究のまとめ

1 成果

児童の存在自体を大切に思い、それぞれの頑張りやよさを継続的に伝えたことにより、教師と児童の信頼関係が深まり、学びに向かう雰囲気が醸成されていった。アンケート結果によると、五段階評価で「授業がとても楽しい」「楽しい」と感じる児童の割合は80%以上になった。以前より、全体の場で説明したり、考えを発言したりできる児童が増え、意見交流も活発になった。また、「安心して授業を受けることができる」「自分の考えが大切にされている」と感じる児童の割合も80%を超えた。手立てを講じ、円滑な話合い活動が行われたことで、多くの気付きや学びが生まれ、コミュニケーションを楽しみながら学び合う児童の姿が表れた。

2 課題

発達支持的生徒指導四つの視点の全てを、毎回意識して取り組むのは困難である。本時の授業で力を入れる取組を焦点化して実施する必要がある。また、アンケート結果の変容が小さいのは、質問が抽象的だったことも原因として考えられる。そのため、事後に手立ての有効性を検証して次の授業へとつなげていくことも大切である。例えば、「安心して学習できたか」「考えが大切にされているか」という問い合わせを設定していたが、「どんな場面で安心を感じられたのか」「どういう時に考えが大切にされていると感じたのか」と、深く掘り下げる、より具体的な設問にすることで、児童が安心して学びに向かうことができるよう有効な手立てを整理していく必要を感じた。